小林さん（松岡）せん茶で内閣総理大臣賞を受ける

【写真・総理大臣賞を手に小林さん、渡辺市長と一緒に】

昭和53年度全国農林水産祭で、市内松岡75－5の小林由秋さん（38）が、農産部門（せん茶）でこのほど内閣総理大臣賞を受賞しました。

小林さんは、前年度の第31回全国茶まつりで、農林大臣賞を受けており、ことしはみごとに内閣総理大臣賞の栄誉に輝きました。

現在、小林さんは2ヘクタールの茶園を経営、常に研究熱心で土壌診断を行うほか、徹底した茶園を管理し、地域のリーダーとしても著しい業績をあげ、新しいタイプの営農家として高く評価されています。

「松風学校跡」の記念碑建つ

「松風学校跡」の記念碑がこのほど市内久沢東の後藤孚さん方敷地内に建立されました。

松風学校は明治12年、初めて校舎を持った小学校で場所はいまの鷹岡小学校正門から用水路ぞいに東へ100㍍ほど行ったところ。碑の高さは約1㍍の黒ミカゲ石に「松風学校跡」ときざまれ、道行く人にその100年の歴史を物語っています。

お正月の餅をつかない
桑崎、鵜無ヶ渕部落
"餅をつくと火にたたる"

昔から桑崎部落と鵜無ヶ渕部落は「餅をつくと火にたたる」という伝説があって、正月用の餅をつきません。でも中には、子どもたちがかわいそうだといって、他村の親類から持ってきてくれたり、ウルチの餅をつくったり、あるいは「とじもち」といって、家の奥の方でないしょに餅をついた家もありました。

正月のお餅をおおっぴらではつかないという習慣は、今でもつづいています。しかし近頃では、隣り近所にわからないように機械でつけるようになったので、たいていの家で、いい伝えにこだわらないで餅をついているようです。

なぜ、正月の餅に限ってつかないのか、それはいつごろからなのか明らかではありませんが、部落の古老の話をまとめてみますと

「むかし、不作がつづいて大飢饉（だいききん）に襲われ。そして村人が飢え死にするような事態になった。そのとき、この村の領主旗本戸田氏の中里村の陣屋から役人が調査にやってきた。村人は調査の役人に貧困の実情を訴えるために正月用の餅をつかなかった。いやほんとうに餅などつけるような生活ではなかったであろう」といっています。

あるいは、これが餅をつかなくなったほんとうの原因かも知れません。

むかし、鵜無ヶ渕村で、いい伝えを破って、年の暮に餅をついた家がありました。ところがその晩に氏神の社殿が丸焼けになったので、村人は「火にたたった」といって、その後は禁をきびしく守るようになりました。昭和25年3月11日の晩、湾の西風にあおられて、桑崎部落52戸のうち30戸が全焼するという大火がありました。その原因はいろいろな噂がとんで、真相は明らかではありませんでしたが、誰れいうとなく「暮れに正月用の餅をついた家があったからだ。」という噂をしました。

正月用の餅をつかないという習慣は、村の人たちが、火事を極端に恐れたということも、一つの原因だったと思われます。つまり鵜無ヶ渕村にしても、桑崎村にしても、昔は井戸のない水に不便な村でしたから、とくに火について異常な恐怖心と警戒心があったからで、その上にきわめて切りつめた生活をするということからだったでしょう。

〔この文は富士市の伝説と昔話の七不思議の中から抜すいしたものです。〕